

呉医療センター・中国がんセンター



写真 1 独立行政法人国立病院機構呉医療センター・中国がんセンター

【呉市について】

みなさんこんにちは。

私の思う呉の魅力はなんと言ってもインダストリアルな風景です。分かりにくいかも知れませんが「巨大造船所」や海上自衛隊の「艦船」、火を噴く「製鉄所群」など、日本の基盤を築いた産業・工業の風景が印象的です。特に海からの眺めが非日常的で、ぐっと来ること「間違いなし」です。さらに街を一望するなら呉医療センター11階船屋からの景色がオススメです。

そんな呉市ですがとことん人口は減りました。現在約22万5千人。60歳以上は約9万1千人、その内75歳以上は約4万1千人です。日本の高齢化社会の10年先を行っている様です。

病院で働いていますと特に高齢者が多いと実感は無いのですが、第2次産業に従事される方々は外国人が多いと感じています。そんな呉市の医療状況は、当院の他に400床以上の病院が二つあります。お互い凌ぎを削っている状況ですが、別の見方をしますと人口の割に医療が充実している街なので地域完結型医療の提供が出来る事は、市民にとっては良いことだと思われま

【施設について】

当院の前身である「呉海軍病院」は明治22(1889)年に日本帝国海軍呉鎮守府開庁とともに創設されました。このころ、海の向こうではレントゲン博士のX線発見が目前です。病院の歴史は日露、日中、太平洋戦争と多くの傷病兵を診てきました。写真2は終戦後、英豪軍に接收され返還される昭和31(1956)年時の様子です。当院をバックにした練兵場(現市民広場)の風景です。当時、病院の敷地内外にプールやテニスコート、将校のための洋館作りの宿舎が建ち、後に病院幹部の宿舎となりました。私が若い



写真 2 昭和31年、練兵場から見た当院

頃(もちろん平成)には、当時の医長に招かれ、雰囲気漂う立派な建物の中で酒宴をしたものです。

平成 12 (2000) 年には病院も建て替わり (写真 3)、当時の面影は少しずつ消えて行きました。創設から 130 年の現在は一般 650 床、精神 50 床、職員数約 1250 名を有し、DPC 医療機関 II 群認定、地域がん診療拠点病院、第 3 次救命救急センター、地域周産期母子医療センター、地域医療支援病院など様々な指定を受ける高度総合医療施設として

機能しています。この度の西日本豪雨では、市内で唯一、停電も断水もなく災害拠点病院としての機能を全うしました。因みに約半世紀前に私が生を受けた病院であることも付記しておきます。



写真 3 平成 12 年、高度総合医療施設として建て替わった当院の様子

【私たちの職場】

写真 4 は昭和 15 年頃の撮影室の様子です。凛とした先輩と立派な撮影装置が写っています。時代は変わり現在は技師総勢 27 名、放射線科医師 5 名、看護師 4 名、非常勤助手 5 名。技師の平均年齢は 34.6 才、男性 22 名、女性 5 名です。役職構成は長副 3 名、主任 8 名、技師 16 名となっています。機器の老朽化に不平を言わず、働き方改革に夢を抱き、そして不安も抱えながら日々頑張っている状況です。

写真の後ろに見えます骸骨さんは、近くの大学の放射線技術科にお婿として出ています。活躍しているようです。



写真 4 昭和 15 年ころの撮影室

【くじらと味自慢】

くじらと言っても食べられません。港近くにあり入場無料の巨大潜水艦を陸上展示する「てつのくじら館」は圧巻です。中に入り潜水艦を疑似体験できます。

味自慢は、居酒屋です。新鮮な地魚のお造りと焼き鳥が同じ店内で食べられること。このようなお店が多いのは呉の特徴と言えます。もちろん舞鶴と戦争中の肉じゃがも頂けます。是非、魅力満載の呉に来て「食べてみなさい！」



写真 5 「てつのくじら館」海上自衛隊呉資料館 HP より転載

【おわりに】

西日本豪雨災害では、多方面よりお見舞いや激励を頂きました。ご心配お掛けしました。この場をお借りし厚くお礼申し上げます。お陰様で職員は無事でした。初めての経験で判断の難しさを痛感し、日頃から災害を意識し行動する事が大切だと感じさせられました。これからも応援の程、宜しく願い致します。